

法と心理オンライン研究会第 39 回記念研究会 プログラム



スケジュール

8月9日（金）	14:00 ～ 16:00	フラッシュスピーチ
	17:00 ～ 19:00	一次会
	19:30 ～	二次会
8月10日（日）	10:00	チェックアウト・自由解散

宿泊施設について

場所：

ホテルピアザ [びわこホテル](#)

京阪電車石場駅から徒歩 5 分、または JR 琵琶湖線膳所駅から徒歩 12 分

アメニティ：

1F にて客室アメニティを必要なアイテムだけご自由にお選びいただけます。

※お部屋にはバスタオル・フェイスタオルのみ

浴場：

各客室にユニットバスあり。7F には展望浴場（営業時間：16:00～23:00）

その他：

- ・ 1 泊 2 食付き（夕食は居酒屋）
- ・ Wi-fi あり
- ・ 駐車場あり

フラッシュスピーチ

8月9日 14:00 ～ 16:00

※参加申込み順

- 一人当たりの持ち時間は 15 分とします。その中で、ご自身の話題提供と質疑応答はご自由にご配分ください。
- オンラインでも同時に中継いたします。

14:15～ FS1 虚偽記憶のデコーディングに向けた脳機能イメージング研究 島根大輔 高知工科大学

想起された記憶が正しいかどうかを同定できれば、司法場面に貢献できるかもしれない。本研究は、提示された視覚刺激の種類を脳情報から好成績にデコードした深層学習による研究に基づき、ヒトの想起した記憶が正しいかどうかを同様にデコードすることを目指している。本発表では、その初期段階として、虚偽記憶の想起に関わる脳領域を同定した MRI 実験の結果を紹介する。

14:30～ FS2 犯罪者に対する社会的排除意識が更生可能性、量刑に及ぼす影響 矢部 芹 関西国際大学

近年、犯罪者の減少に向けて社会復帰支援の重要性が高まっている。刑務所内の更生教育は充実しているが、施設外での市民による受け入れ支援は依然不十分である。2025 年 6 月施行の拘禁刑は更生重視の制度へ転換を図っているが、「犯罪者は更生できない」といった否定的な市民意識が根強く、ラベリングが障壁となっている。こうした排除意識は再犯防止の妨げとなり、市民の意識改革が不可欠である。本研究では、犯罪者への排除意識の特性や量刑への影響、拘禁刑に対する市民意識を明らかにする。

14:45～	FS3 外国語通訳が子どもからの聴取に及ぼす影響：英日バイリンガル児童の模擬司法面接の分析 外国語話者の子どもから事件・事故の聴き取りをする際、通訳を介する影響を調べるために、英語および日本語のバイリンガルの児童 6 名を対象に模擬司法面接を行った。面接は NICHHD プロトコルを用いて、事前に子どもが視聴したビデオの内容を聴き取った。その際、面接者は日本語を用い、英日の外国語通訳者を介して子どもは英語で応答した。今回は、それらの面接について、主に子どもの発話量やその詳細さを分析した結果を報告する。	赤嶺亜紀	名古屋学芸大学
15:00～	FS4 司法面接記録が第三者による司法判断に与える影響 司法面接は、子どもや障がい者から暗示や誘導なく事実を聴取する技法であり、聴取内容は映像で記録される。近年、供述者への精神的負担を軽減するため、司法面接記録が一定の条件下で証拠として採用されるようになった。しかし、「百聞は一見にしかず」という言葉が示す通り、映像は言葉よりも証拠評価に強い影響を与える可能性がある。本報告では、映像による司法面接記録が供述の信頼性（証拠能力）や真実性（事実判断）に影響を与える可能性を考慮し、今後の研究計画を提案する。	武田 悠衣	立命館大学 OIC 総合研究機構
15:15～	FS5 科学的証拠における証拠能力の判断基準の在り方－乳腺外科医冤罪事件を素材に 最決令和 7 年 3 月 12 日 LEX/DB25622256 では、DNA 定量検査について、証明力ではなく証拠能力のレベルに立ち返って判断する必要がある、そうすることで、科学的証拠の証拠能力については厳格な審査基準を要求しているように思われる。本報告は、上述した最高裁決定および差戻審判決を素材に、現在では市民生活の種々の場面で登場するようになった科学的証拠について、文化の一部である科学と一般市民との関係を考える一場面として、刑事裁判における証拠能力の判断基準の在り方について検討する。	外塚果林	洗足こども短期大学

- | | | | |
|---------------|---|----------|------------------|
| 15:30~ | FS6 刑事司法に対する態度および犯罪不安の都道府県差 | 向井智哉 | 福山大学 |
| | <p>先行研究では、厳罰傾向などの刑事司法に対する態度と犯罪不安が関連することが繰り返し示されてきた。他方、この関係性が都道府県レベルの要因によって調整される可能性についてはこれまで検討されてこなかった。本研究では、両変数の関連が都道府県レベルの変数（犯罪認知件数やジニ係数）によって調整されることを想定したマルチレベル分析を実施した結果、想定通りの結果が得られた。この結果から得られる示唆について論じる。</p> | | |
| 15:45~ | FS7 道徳的基盤が非人間化を介して量刑判断に及ぼす影響 | LIU ZEYU | 立命館大学
人間科学研究科 |
| | <p>道徳基盤は、人々の道徳的感覚を反映している。ハイトの道徳基盤理論によれば、人は判断を下す際、無意識に直感的な判断を行う傾向があり、その直感は意思決定において重要な役割を果たしている。結果、道徳基盤の得点が高い人ほど、事件の容疑者に対して非人間化の傾向が強くなり、それが媒介となって厳罰化が促進される。</p> | | |

カンパ出資者御芳名

金額・50 音順

〃

金 3 万円

松尾朗子

金 2 万円

藤田政博

笹倉香奈

金 1 万円

板山 昂

赤嶺 亜紀

井奥智大

向井智哉

福島 由衣

綿村 英一郎

指宿信

緑 大輔

向井 智哉

金 5 千円

武田 悠衣

廣田 貴也

以上